



一所懸命 恩返し Vol. 4

『心得十か条』

大野 博之

今号も「古賀武夫ブックレット 第四号 『一所懸命 恩返し』」(平成七年一月、平成十一年六月)から、古賀先生の一九九六年(平成八年)の後半の言葉を辿ります。

私の九州論

「二つは食糧の自給自足で、日本が最も出ていないことだ。二つ目は基礎教育の普及。これに関連して三つ目は自分たちの地域の環境を知ること。環境保全に農山村がどういう役割を果たしているかを知ることが大切だろう。四つ目は、人間は自然の一部であり、自然との共生によって生かされていることを意識することだ。」

古賀先生が好きだった言葉に「自給他足、他給自足」があります。禅を学んだ先生らしい言い回しです。「自分のものを他の人に与えれば、他の人が自分に与えてくれるという意味ですか?」と尋ねたところ、「そうとも言えるが、お前は損得で考えるところがまだ甘い。自分が他人に施せば自分の喜びが増え、他人から施されれば感謝で自分の喜びが増える。何だっとうれしうれしなくなるってことだ。他の人がどうしようも、自分が幸せになろうと思えば何時でもなれる」と答えられました。これに「相互扶助関係に深く意識を向け、自然の一部である人間は自然に対して謙虚でなければならぬ。それが生かされる自分に気づいた証だからだ。」と普段から話していたことが合わさって、これからの九州、この場合「日本」と言ったほうがいいかもしれませんが、の進むべき道の基本として、上記の四か条を挙げていたのでしょう。上記「私の九州論」は発行先は不明ですが、雑誌の特集で「九州発 私九州論」に掲載されていたインタビュー記事の中にあります。

地球市民の会的 国際協力心得十か条

一、人に求める前に、自分のことは自分でやれ。協力は自助努力のあるところにせよ
二、協力する喜び、達成感、成就感が活動の源

三、スタートラインに付くまでの協力が我々の役目

四、求めるな、与え合え

五、対症療法より根本治療

六、自立を待て。そのためには手段は問うな

七、援助は、心・魂の成長ある人に

八、身近な人に認めてもらう

九、食うことが一番、食えば生きられる、生きていれば何かいいことが出来る。

十、リーダーの三条件は、気合、智慧、持続力

タイでのテラトピア計画が難しい局面に入りつつある時期でした。九十三年二月に始まった山岳少数民族カレン族の村、タイ王国チェンマイ県メーター村でのプロジェクトであったテラトピア計画。その目的はいずれ来る近代化の波に飲み込まれ村が衰退することを防ぐために、自給自足で自立できる村を作ることになりました。当初、合意をした援助側の地球市民の会と被援助側のメーター学校ではありましたが、その理想の前に途上国の最貧困地域の状況は厳しく、住民には近未来の理想よりも、今ここにある問題を解決することを望むようになりました。

簡潔に言う、将来に向けて自立でき食べられる学校システムを作った↓近隣から噂を聞いて子どもを連れて親が来た↓自立のために受け入れられる子どもの数の限界を超えた↓山岳少数民族の貧困な子どもすべてに教育を与えたい学校は自立用の畑を校舎にしたいと言った↓自立を前提にした地球市民の会は出来る範囲で運営すべきだと主張し学校は全ての子どもが教育を受け貧困の鎖から放たれるべきだと主張した。長期的ビジョンに従い進めたい地球市民の会と、今ある子ども達の問題をなんとかしたい学校の間で意見の違いが出てきたところの古賀先生の心境を汲み取れます。

古賀道場の 学び方心得十か条

一、人に教えてもらう前に、自分のことは自分でやれ。努力に勝る天才なし

二、生かされ、学ばせていたただける喜び、達成感、成就感が稽古・勉強の源

三、スタートラインに付くまでが先生、親の役割、それからは自分で走れ

四、感謝が信頼となり心の絆となる

五、基本をしつかり正せ

六、遊びが好きならしつかり遊べ、後悔するな、必ず起き上がる時が来る、自分を信じて自分を持つて

七、教えは心、魂の成長ある人に

八、身近な人を笑顔にせよ

九、食うことが一番大事、食えば生きられる、生きていれば人の役にたてられる。

十、リーダーの三条件は、気合、智慧、持続力

皆さんもご存知のように古賀先生は豪快そうに見えて繊細なところも有りました。タイのテラトピア計画での板ばさみの苦勞は古賀先生自身にもいろんな意味で考え直す作業をさせたようです。途上国と向き合う先進国や被援助者に対する援助者という関係性と教育を受けるものと教育者の関係性を対比させているのが、前出の「地球市民の会的 国際協力心得十か条」と「古賀道場の 学び方心得十か条」の表現でわかります。英語道場では「NHKラジオ講座」を毎日聞くことを受講の条件にしてみました。十か条の一、二、三番目は自らが立ち上がる姿を求めているメッセージでした。英語の受講生にもそれを求めたのでしよう。空手はこのころ、少年の部の対外的な試合での好成績を受け、別段、稽古に励め、というメッセージはなかったのですが、「自分の好きなことを見つけて打ち込め」「二度はじめたら最後まであきらめな」「笑っている」ということをおっしゃっています。十か条の八番目に「身近な人を笑顔にしろ」が入っているのは、タイの子どもを幸せにするために肩間に縦しわを寄せて、難しいことでも悩まなければならぬ状況を憂いていたのかもしれない。

(以下続く)